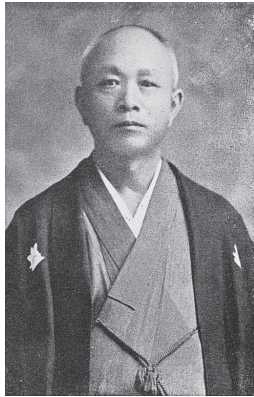


コーヒーは情熱の香り —水野龍とブラジル移民—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也



水野 龍

コーヒーは明治後期から大正にかけて広く飲まれるようになった。きっかけとなったのは水野龍(1859-1951)を先導者とする日本初のブラジル移民だ。移民たちの艱難辛苦のコーヒー栽培の精華は水野が東京・銀座を拠点にチェーン展開したカフェパウリスタによって全国各地に伝えられた。ブラジル移民の父と呼ばれた水野は日本におけるカフェ文化の先駆者でもあった。一杯のコーヒーにも歴史的なドラマが秘められていることを水野の国境を超えた情熱的生涯は教えてくれる。

自由民権と海外雄飛の夢

水野は幕末の時代に現在の高知県佐川町で土佐藩士の次男として生まれた。武士にも庶民にも門戸を開いた郷校・名教館で学び、北原村小学校の教員となった。多感な青春時代を迎えていた水野は明治11年(1878)、19歳のときに自由民権を訴える過激な演説で逮捕される。高知出身の板垣退

助らが開始した自由民権運動は薩長の藩閥政治を批判し、議会の開設、憲法の制定、言論の自由などを求めている。

これを機に水野は上京して慶應義塾に入り、苦学しつつ明治21年(1888)、29歳でようやく卒業する。在学中に創立者の福沢諭吉から世界へ雄飛する夢を触発された。文明開化論を唱えた福沢は門下生に海外渡航を盛んにすすめ、著書の『世界国尽』でブラジルがアメリカに次ぐ移民大国であると紹介していた。

卒業後、水野は自由民権運動の先達である同郷の後藤象二郎通信相を頼って岡山県庁に勤務する。だが後藤の死によって官界での活躍を諦め、政界への転身をめざす。

明治31年(1898)、39歳になった水野は奈良県から代議士に立候補した。しかし選挙中にまたしても過激な演説をして40日間投獄される。水野が立身出世のために政治家になろうとしたのではないことを物語るエピソードだ。

政界への道も断たれた水野は実業界に転じ、電力事業を通じて国を興すという観点から深川電燈株式会社を設立する。同社はのちの東京電力となる東京電燈に吸収合併された。

さまざまな紆余曲折を経てついに水野が活路を見いだしたのは海外だった。新たに皇国植民合資会社を立ち上げて本格的な移民事業に乗り出していく。

万難を克服して銀座にカフェ

明治38年(1905)、水野はペルー経由でブラジルに渡り、日本公使館の協力のもとに政府要人との会見やサンパウロ州の主要耕作地の視察などを行った。明治40年(1907)、ふたたび現地に赴いてサンパウロ州政府と日本人農業移民導入契約を結ぶことに成功する。

翌年の4月28日、史上初のブラジル移民団として水野を団長とする158家族781名を乗せた笠戸丸が神戸から出航した。一行は約50日かけて同国サントス港に無事到着する。

しかし希望を胸にコーヒー園に入植した人々を待ちうけていたのは炎天下の過酷な重労働や風土病だった。収穫期を過ぎていたコーヒーは不作で水野に騙されたと脱落する者も少なくなかった。水野は「諸君は日本を代表し、この地の開拓移民としてはるばる渡ってきた。諸君の手から収穫されるコーヒーは日本の国産品であるといっても過言ではない。後続移民のためにも万難を克服して努力されたい」と粘り強く説得した。

2回目の移民では豊作に恵まれ、渡航を重ねるごとに労働環境も改善されて移民事業への評価は高まっていった。明治43年(1910)、サンパウロ州立政府は水野の功績に対して5年間のコーヒー豆の無償供与と東洋における宣伝販売権を与えた。同年、水野は合資会社カフェパウリスタを設立し、社長に就任する。カフェはポルトガル語でコーヒー、パウリスタはサンパウロっ子を意味していた。

翌年には現在の銀座6丁目に白亜3階建ての瀟洒な直営店をオープンした。各界の名士を招いた席で水野は「きょう皆さま方に供するコーヒーは日本移民の労苦がもたらした収穫物で、この一杯には汗の結晶がしみ込んでいる」と感慨深くあいさつした。

銀座店にはブラジルの国旗が翻り、夜はイルミネーションが煌々と輝いて大正モダニズムを象徴する社交の場となった。北欧風のマントルピース、大理石のテーブル、ロココ調の椅子など豪華な内装にもかかわらず1杯5銭という破格の安値で

日々4000杯の注文を受けるほど繁盛した。作家の芥川龍之介、歌人の吉井勇、演出家の小山内薫など多くの文化人が常連となっている。

広告宣伝も独創的で燕尾服、シルクハット、白手袋で正装した大男が美少年を伴って「悪魔の如く黒く、地獄の如く熱く、恋の如く甘い」というキャッチコピーの試飲券を配ったり、女学校出の洋装婦人による試飲会を開いたりした。店は日本初のチェーン展開で東京、横浜、名古屋、京都、大阪などの大都市圏に加え、北は仙台、札幌、南は福岡から中国の上海まで広がり、カフェブームの礎を築いた。

ところが第1次世界大戦後の不況のなかで様相は一変する。大正12年(1923)、関東大震災の襲来によって銀座店をはじめ首都圏の店舗は瓦礫と化し、さらにコーヒー豆の無償供与も終了して各チェーン店はそれぞれの責任者や共同経営者に譲渡された。その後カフェパウリスタは焙煎卸業として復活し、創業の地・銀座に直営宣伝店を構えている。

世界と共存共栄する道へ

水野は大正13年(1924)、家族と共にブラジルに渡って農業に携わった。資金調達のために一時帰国したところ太平洋戦争が勃発し、約10年間にわたって足止めされる。昭和25年(1950)にようやく家族の待つサンパウロに帰ることが許可され、翌年に92歳の長寿で永眠した。

明治以後の日本は西欧諸国と対抗する富国強兵策のもとで農民に重税を課し、武力によるアジアの植民地化を強行していった。水野によるブラジル移民はこれと明確に一線を画していた。息子に「世界中の人々がおなじように働いて生きていくことが本当じゃないか」と繰り返し語っていた水野は他民族との平和的な協働による共存共栄の道をめざしていた。

水野の死後、初の日本移民団がサントス港に上陸した6月18日はブラジルで「日本人移民の日」、日本で「海外移住の日」と定められた。サンパウロとリオデジャネイロを結ぶ高速道路には水野の名を冠した橋が架かっている。